

南から来た 瑠璃色の貝

～“今起きている十大事件”の証拠～

淡い青紫色で、透きとおるほど薄い殻の巻貝、ルリガイ。英語では「violet shell」、和名はもちろん「瑠璃色」からきています。

貝の仲間はほとんどは海底、砂の中や岩場で暮らしていますが、ルリガイの仲間は海面に浮かんで暮らしています。粘膜の泡を出して、浮袋を作り、軽量化のためギリギリまで薄くなった殻をもつて、風や海流に流され漂い、同じように浮遊生活をしているギンクラゲを食べています。本来は暖流系の生物で、西日本周辺の暖かい海で見られないはずですが、ごくごくまれに函館など道南地方の海岸に流れ着いているのが見つかることがあります。

いしかり砂丘の風資料館が2004年に開館してから20年間。毎朝、石狩浜で海水温観測や漂着物調査を続けていますが、2007年秋、ルリガイが発見されました。石狩湾沿岸で見つかったのは、後にも先にもこの1回だけ。石狩より北では記録はありません。この石狩標本は、ルリガイの最北記録なのです。

※ ※ ※
20年間調査を続けてきたら、1年2年では分からない、石狩の海辺のいろいろな変化が見えてきました。ヤシ

の実やエチゼンクラゲ、アオイガイなど、暖かい海から流れてくる生物の増加。イシイルカの連続漂着。プラスチック片やペットボトルごみの増加——。海水温や海流、取れる魚種の変化など、海の変化は空の変化よりも長い時間、数十年というスケールでじわじわと変化していきます。石狩の海辺がどのように変わってきたのか、20年間の継続調査でやっと尻尾をつかみかけたところでしょう。自然や人間の歴史を記録し、伝えていく役目を担う博物館として、数十年、数百年といった、人の世代を超えた時間の感覚が必要——。続けてきた自分でも、やっと実感できてきました。

石狩で起きてきた事件の証拠を積み重ねていく。それは、目先の利益や効率のために途絶えさせては決して

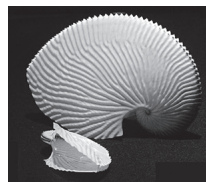
いけない。資料館20年間の活動なんて「まだまだ始まったばかり」です。今起きている事件の証拠、「最北記録のルリガイ」は、20周年記念特別展「石狩十大事件 何が現在の石狩をつくった？」で、10日(日)まで展示しています。
(志賀健司)



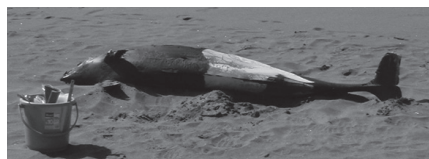
浮遊性の巻貝、ルリガイ。
石狩浜で発見されたこの標本が最北記録。



エチゼンクラゲ



アオイガイ



イシイルカ



学芸員
志賀 健司 Kenji Shiga

専門は地質学・漂着物学・海辺学。地球の環境の変遷などを調べるとともに、石狩の浜辺にどんなものが漂着し、それがどんな意味を持っているかを研究している。

10(日)まで開催中!
いしかり砂丘の風資料館 開館20周年記念特別展
石狩十大事件 何が現在の石狩をつくった?

※火曜休館。入館料(大人300円)が必要です

図文化財課 いしかり砂丘の風資料館 ☎62・3711 ※火曜休館